

8 . マキラドーラの変遷と NAFTA

メキシコの保税加工区であるマキラドーラの制度は 1965 年に導入された。メキシコ北部の米墨国境地帯に広がるこの工場群は、米国オフショア生産の最大の拠点となり、NAFTA の発効とともに存在価値を高めた。とくに 94 年のペソ危機以降は、ペソの減価による労働コスト低下を理由に、新しい投資が相次いだ。2000 年 1 月、マキラドーラの戻し税制が NAFTA 第 303 条および 304 条の規定によって廃止され、代わっていわゆる PROSEC 制度が導入された。域外からの中間財輸入に対する一律免税がなくなったのである。

マキラドーラは米墨産業・経済一体化のための実験場であり、先進国と開発途上国の貿易に先例を開くものであった。こうした見地から本調査では、マキラドーラの成立から現在までの過程に加えて、PROSEC の導入と改正を跡づけるとともに、環境を中心にマキラドーラに関わる問題を分析することに主眼を置いた。以上が本報告書の中核部分であり、第 2 章を構成している。

第 1 章では、発足後 8 年目を迎えた NAFTA のこれまでを概観した。経済一体化の事実を何よりも示すのは、域内貿易比率の増大で、1999 年には輸出ベースで 54% を超えるにいたっている。そのほか、域内外の直接投資状況をも分析した。また、NAFTA の特質というべきものは何か、その成功をもたらしたものは何か、などを論じた。

第 3 章は、これからを展望した。71 年間の PRI 独裁を打破したメキシコのフォクス大統領と、激戦を制して登場した米国のブッシュ大統領。前者は NAFTA の深化による北米共同市場を提唱し、後者は父の理想を伝承し、FTAA の実現をめざして 4 月のケベック・サミットにのぞむ。21 世紀の米州政治経済のキーワードは、疑いもなく自由貿易である。その具現に向けて、どのような路線が用意されているのだろうか。最後に、当面の課題として、米墨間のトラック問題、米加間の木材問題などをのべた。